

『聖濟總録』口齒門における口腔軟組織疾患の分類について

戸出 一郎

『聖濟總録』は北宋政和年間（一一二一～一一二七）に政府によって編纂された医学全書である。

本書の百十七巻から百二十一巻までは口齒門で、口腔内における軟組織並に硬組織（歯牙）の疾患の病理と治法について述べられている。硬組織疾患については前回報告したのでこの度は軟組織疾患について報告する。

口齒門における口腔の軟組織疾患は次の十一項に分類されている。

口瘡・口糜・口吻瘡・口舌乾焦・口舌生瘡・口嗅・唇瘡・唇生核・緊唇・重舌・舌腫強

この分類は概ね『諸病源候論』（以下『病源』）における唇口諸病の分類に倣っているが必ずしも同一ではない。

『聖濟總録』における病理論によれば、「口瘡」は心脾の熱気が上焦をついて口舌に瘡を作るものであるが、一方、胃気が弱く、穀気少く、そのため口瘡を作ることがあり、両者は本質的に異なるものであるから病の本質をよく見極めて両者を混同しないように注意しなければならないと述べている。口瘡には虚実の二態があると言っているのである。

「口糜」は膀胱の熱が小腸に移り、水穀の運輸が妨げられて、その結果口瘡糜爛を生ずるものだという。また「口舌生瘡」では心脾の積熱が上攻して口舌の間に瘡を生じ腫痛させるとしている。

口瘡・口糜の二者は『病源』には記載がない。『病源』では口舌瘡候のなかで口舌瘡の病因を心脾の熱によるとし、診法として脉浮数をあげるのみであるが、『聖濟總録』では臟腑・経絡の陰陽虚実に基づいて細かく分類されている。

「舌腫強」については、宋初の『太平聖惠方』では

治舌腫強諸方と並んで治木舌諸方があるが、木舌は舌腫強と本質的に同じ疾病なので『聖濟総録』では木舌を舌腫強の中に包含している。

その他の疾病の分類と解説は概ね『病源』に基づいているが、一般に説明は『病源』より詳細である。なお『病源』唇口諸病中の唇口面皴候・兔缺候・瘖吃候・懸癰候・咽喉垂倒候・失欠領車蹉候・数欠候・失枕候についてはここではとりあげられていないが、懸癰候は咽喉門の中に入れられている。

上述のように『聖濟総録』の編者は口腔軟組織疾患の分類にあたり、疾病の範囲を限定し、『病源』を基礎としながら『病源』の不備を補い、臟腑経絡の陰陽虚实を明確にして、より合理的な分類にしているように思われる。宋初の『太平聖恵方』における分類と病理論が殆ど『病源』の模倣であるのに比較すれば、『聖濟総録』では模倣に陥らず、内経医学の基礎の上立った独自の分類がなされているように思われる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

『飲膳正要』に関する考察

—聚珍異饌を中心として—

加藤 伊都子

『飲膳正要』三巻は、元の忽思慧らの撰になる食養・養生・本草書である。忽思慧の伝は明らかでないが、巻首に付された元の文宗トク・テムール宛の進表によると、思慧は当時飲膳太医の職にあつて、天曆三年(一三三〇)三月三日に本書を進上した。飲膳太医とは世宗フビライの設けた元代特有の官職で、定員四名、宮中の飲食事を司る。思慧は延祐年間(一三一四〜二〇)にこの官に補任され、その恩に応えるため、趙国公の常普蘭奚とともに料理の研究を重ね、種々の資料を参考に集成して本書を編纂したという。

本書は元朝においては出版されず、明の景泰七年(一四五六)、勅命により代宗の御製序を付して刊行された。清